

研究分野のキーワード：東洋史、中国古代史、中華、華夷思想、東アジア世界

## 研究紹介

「中国」とは何でしょうか。中華人民共和国の略称だと思っている方がいるかもしれませんが、それは誤解です。「中国」という語句は、今から約3000年前の青銅器に鑄込まれた銘文の中に、すでに見えています。ただしそれは、あの巨大な中国に直接繋がるような呼称ではありませんでした。

当時、黄河流域を統治していたのは周しゅうという王朝でした。前述の青銅器銘文では、その周王朝の創始者（武王）が、新しい都城の建設地（現在の河南省洛陽市周辺）を「中国」と呼んでいます。恐らくそこには、王朝が統治する世界の中心地という意味が込められていました。つまり「中国」は本来、国名でもなければ広い地域名でもなく、周王朝の都城の周辺という、ごく限られた範囲の土地を指した呼称に過ぎなかったわけです。

この「中国」の範囲は、春秋・戦国時代を通じて次第に拡大し、やがて前漢時代になると、統一王朝や黄河・長江流域を指す呼称として用いられるようになりました。以後こうした用例が継承されてゆきますが、それでも時代によって「中国」の範囲は必ずしも一定ではなく、また「中国」を統治した王朝の版図や民族も実に多様でした。歴代王朝の版図のうち、どこまでを「中国」と呼べるのか、明確な答えを用意することは難しいのです。

このように「中国史」と一口で言っても、「中国」の範囲や意味は自明のものではなく、時代とともに大きく変化してきたことが解ります。現在の中国は、その長い歴史的経過の結果にすぎません。古代から現在まで、「中国」というはっきりとしたまとまりが続いてきたわけではないのです。

また「中国」は、単なる国や地域の名称ではなく、文明や秩序の“中心”や“内側”といった意味が込められた観念的呼称でした。それは同様の意味をもつ「華夏かか」や「諸夏しよか」などと結合し、いわゆる「中華ちゅうか」観念を形作ります。一般的に、「中華」を世界の中心に位置づける思想を「中華思想ちゅうかしそう」、「中華」と「夷狄いてき」の対立や差異を論ずる思想を「華夷思想かいしそう」と呼びます。これらは東アジア世界で、王朝の外交・戦争・交易・異民族統治や、異なる民族同士の関係を説明づける論理として、ずっと用いられてきたものです。その影響は、形を変えながらも現在まで続いていると言ってよいでしょう。

私は、中国古代史を専攻し、こうした「中華」や「華夷思想」の成り立ちや構造を追求しています。最近の中国では、経済発展と開発に伴い、新しい史料の発見が続いています。こうした新しい史料を読み解きながら、これまで不明であった歴史的事実を一つ一つ復元し、問題を解決してゆく楽しさは、何ものにも代え難いものですし、現代中国という巨大で不可避な隣人をよく知るためにも、必要な営みの一部なのだろうと考えています。

